旺文社文庫

レ・ミゼラブル(上)

—縮訳版—

ユゴー著
大久保和郎訳

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕　伊藤整　茅誠司　木村毅
（五十音順）　塩田良平　中島健蔵　森戸辰男

旺文社文庫　レ・ミゼラブル（上）　240円
――縮訳版　全二巻――

昭和40年10月1日　初版発行
昭和44年6月1日　重版発行
訳者　大久保和郎
発行者　鳥居正博
組版所　旺文社専属　日新印刷株式会社
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
（中村印刷・清水印刷・穴口製本）

株式会社　旺文社
162 東京都新宿区横寺町
電話 東京（03）267-1111〔代〕

落丁・乱丁・不良本はお取替えいたします。書店または本社に直接お申出ください。

埼玉県立熊谷図書館蔵書
昭和45年7月25日受入
620—03

© 大久保和郎 1965
（許可なしに転載，複製することを禁じます）

旺文社文庫

レ・ミゼラブル（上）

—縮訳版—

ユゴー著
大久保和郎訳

旺文社

原典はきわめて大部のため、この訳では、原作の意図をまげない範囲で削減し、読者の便をはかった。

序

法律や習俗によって、文明のただなかに人為的に地獄をつくりだし、神の定めた運命を人間社会の宿命によってかきみだす、社会的処罰というものが存在するかぎり――、この世紀の三つの問題、すなわちプロレタリア的境遇による人間の品位喪失、飢えによる女性の堕落、夜の闇を恐れて子供がやせほそること、この三つの問題が解決されぬかぎり――、いくつかの地方で社会的窒息がおこりうるかぎり――、いっそう広い見地に立って換言すれば、地上に無知と貧困というものの存在するかぎり、本書のような性格の書物も無用ではありえないだろう。

一八六二年一月一日

オートヴィル・ハウスにて

ヴィクトル・ユゴー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目　次

序……三　主要登場人物……八

第一部　ファンチーヌ

第一編　正しい人……九

一、ミリエル氏……九
二、ミリエル氏、ビヤンヴニュ猊下となる……一三
三、よい司教につらい司教区……一七
四、ことばにふさわしい行為……一八
五、ビヤンヴニュ猊下がその僧衣を長持ちさせすぎたこと……二四
六、だれに彼は自分の家を守らせたか……二六
七、クラヴァット……三〇

第二編　堕　落……三五

一、一日歩いた日の夜……三五
二、釈迦に説法……五一
三、受動的服従の勇気……五五
四、ポンタルリエのチーズ工場の話……六三
五、静　け　さ……六六
六、ジャン・ヴァルジャン……六八
七、絶望の内側……七三
八、新しい不満の種……七四
九、目を覚ました男……七六
十、彼がしたこと……七九
十一、司教の仕事……八一
十二、プチ・ジェルヴェ……八六

第三編　預けることは時として譲与することとなる……九二

一、母と母の出会い……九二
二、うさんくさい二人の人物……九八
三、ひ　ば　り……九九

第四編　零　落……一〇三
一、黒ガラス玉製造の改良の沿革……一〇三
二、マドレーヌ……一〇五
三、ラフィット銀行の預金……一〇八
四、喪服のマドレーヌ氏……一一〇
五、不安なきざし……一一三
六、フォーシュルヴァンじいさん……一一四
七、フォーシュルヴァン
　パリで庭番となる……一二〇
八、ヴィクチュルニヤン夫人の出費……一二一
九、ヴィクチュルニヤン夫人の成功……一二四
十、成功のつづき……一二七
十一、市警察の諸問題……一三四
第五編　ジャヴェール……一四三
一、安息のはじまり……一四三
二、どうしてジャンが
　シャンになったか？……一四六
第六編　シャンマチウ事件……一五六
一、サンプリス修道女……一五六
二、スコーフレール親方の先見の明……一五九
三、サンプリス修道女の試練……一六六
四、特別入場……一七〇
五、裁きの場所……一七三
六、否認のしかた……一七六
七、シャンマチウますます驚く……一七九
第七編　反　撃……一八五
一、マドレーヌ氏、鏡を見る……一八五
二、しあわせなファンチーヌ……一八八
三、満足したジャヴェール……一九四
四、警察の権威回復……一九六
五、修道女のうそ……二〇二
第二部　コゼット
第一編　ワテルロー……二〇九

一、ワテルロー会戦についての考察……二〇九
二、夜の戦場……二一五
第二編　軍艦オリオン号……二二二
一、二四六〇一号が
　九四三〇号となる……二二二
二、悪魔が出る場所……二二五
三、足輪の鎖……二二九
第三編　死んだ女への約束……二三七
一、モンフェルメイユの飲料水の問題……二三七
二、二人の肖像の補足……二三九
三、人には酒、馬には水……二四四
四、人形の登場……二四八
五、夜道をひとりぼっちで……二四九
六、ブゥラトリュエルの
　勘は正しかったか……二五四
七、闇のなかで見知らぬ人
　とならんだコゼット……二五九
八、金持ちとも貧乏人ともわからない人
　間をどうあしらったらよいか……二六四
九、テナルディエのかけひき……二六六
十、欲ばりすぎるとばかをみる……二九五
十一、九四三〇号の再現……三〇三
第四編　ゴルボー屋敷……三〇五
一、ふくろうと嫗白の巣……三〇五
二、二つの不幸、一つの幸福……三〇八
三、借家人頭のばあさんの見たこと……三一一
四、床に落ちた五フラン銀貨……三一四
第五編　暗夜の狩り、無言の猟犬……三一九
一、作戦の困難……三一九
二、オーステルリッツ橋を渡る……三二一
三、ル・プチ・ピクピュス……三二三
四、手さぐりの逃走……三二六
五、ガス燈がついていたら
　できないだろう……三二九

六、なぞのはじまり……三三四
七、なぞのつづき……三三七
八、なぞは深まる……三三九
九、鈴をつけた男……三四一
十、ジャヴェールの失敗の理由……三四七

第六編　墓地は死人を選り好みしない……三五四

一、修道院にはいる方法について……三五四
二、困難に直面したフォーシュルヴァン　三六二
三、生者と死者……三七〇
四、意外の難関……三七七
五、棺のなかで……三八三
六、鑑札……三八四
七、及第できた面接試問……三九〇

第三部　マリユス

第一編　大ブルジョワ……三九五

一、プチ・ガヴローシュ……三九五
二、九十歳で三十二本の歯……三九八
三、「晩でなければ訪問をうけない」という規則……三九九
四、そのころの赤い幽霊のひとり……四〇二
五、強盗の最期……四〇九
六、教会で知った真相……四一四
七、その後のいきさつ……四一六
八、女のしりを追いまわす……四一九
九、花崗岩対大理石……四二六

解説……四三三
ユゴーの人と文学……四三三
作品解説……四四〇
作品鑑賞……（下巻）
唯一最大の愛読書……木村　毅（下巻）
主要作品解題……（下巻）
参考文献……（下巻）
年譜……（下巻）

挿絵　山本彪一

主要登場人物

ジャン・ヴァルジャン　ファヴロルの貧しい枝切り職人。一きれのパンを盗んだため徒刑場に送られ、十九年の刑期ののち放免される。その後マドレーヌという名で市長となる。この小説の主人公。

ビヤンヴニュ猊下　ディーニュの司教。高徳の誉れ高く、ジャン・ヴァルジャンを更生させる。

ファンチーヌ　モントルイユ・シュル・メール生まれの孤児で、パリに出てお針女をしているうちに子供ができ、郷里に帰って悲惨な暮らしをする。肺病で死ぬ。

コゼット　ファンチーヌの娘。宿屋の主人テナルディエにあずけられ、さんざんいじめられる。ジャン・ヴァルジャンに救われ、養女となる。

テナルディエ夫婦　モンフェルメイユで宿屋を経営している。貪欲で悪らつ。のちパリに出て悪事を働く。

ジャヴェール　ジャン・ヴァルジャンを追跡する刑事。職務の遂行に当たっては執拗冷酷であるが、一面きわめて廉直である。

フォーシュルヴァン　モントルイユ・シュル・メールの馬車ひき。自分の車の下敷きになったところを市長（ジャン・ヴァルジャン）に救われ、以後彼を尊敬してやまない。

マリユス・ポンメルシー　ナポレオン軍大佐の子。母方の祖父のもとにあずけられているが、かくれた父の愛情を知り、祖父の家を飛び出す。

ジョルジュ・ポンメルシー　兵士から身を起こして男爵にまでなった勇敢な軍人。マリユスの父。ワテルローで負傷し、テナルディエに救われたと思っている。孤独のうちに死ぬ。

ジルノルマン　九十歳を越えてなお元気なブルジョワ。マリユスの祖父。頑固な王党派で、死んだ娘の夫ジョルジュ・ド・ポンメルシーを憎みぬいている。

プチ・ガヴローシュ　パリの浮浪児。実はテナルディエ夫婦の息子である。下巻で大活躍する。

エポニーヌ
アゼルマ　テナルディエの娘。

第一部　ファンチーヌ

第一編　正しい人

一、ミリエル氏

一八一五年にシャルル＝フランソワ＝ビヤンヴニュ・ミリエル氏はディーニュの司教だった。およそ七十五歳の老人で、一八〇六年からこの司教の地位についていた。

ミリエル氏は法官貴族であるエクスの高等法院の判事の息子だった。この父は彼を自分の後つぎにするつもりで、高等法院裁判官の家柄にかなりひろまっていた習慣にしたがって、十八歳か二十歳で彼を結婚させてしまったという話である。この結婚にもかかわらず、シャルル・ミリエルはとかくうわさの種になるようなふるまいをしでかしたそうだ。風采はよく、小柄だったが、粋で上品で才気があった。若いころは社交界に入りびたって情事にばかりふけっていた。そこへ大革命がおこり、やつぎばやにいろいろの事件がおこり、高等法院裁判官の家柄の人々は殺され、追い出され、追い立てられ、四散した。シャルル・ミリエル氏は革命の初期にイタリアへ亡命した。妻はだいぶ前からかかっていた胸の病気のためにイタリアで死んだ。夫妻のあいだに子供は全然なかった。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

の後ミリエル氏の運命に何がおこったか？　古いフランス社会の崩壊、彼自身の家の没落、一七九三年の恐怖時代の悲劇的な光景、こういったものが彼の心のうちに隠遁と孤独の考えをはぐくませたのであろうか？　なぐさみと色恋に明け暮れする生活のただなかで、社会の大変動によって生活も財産もだいなしにされながら毅然としているような人間の心をも、時として打ちのめしくつがえす、あの神秘的な恐ろしい打撃に見舞われたのだろうか？　だれもそれは知らない。わかっていることはただ、イタリアから帰って来たとき彼が聖職者になっていたことだけである。

一八〇四年にはミリエル氏はブリニョルの司祭だった。彼はもう年を取っていて、深い隠遁のなかで暮らしていた。

ナポレオンの皇帝即位のころ、何であったか今はもうよくわからないが、職務上のちょっとした用件で彼はパリへ立った。多くの権勢ある人物のなかでも彼はフェーシュ枢機卿のところへ行って、自分の教区民のために請願をおこなった。皇帝が自分の叔父である枢機卿を訪問した日、控えの間で待っていたこの司祭は陛下の通り道に居合わせることになった。ナポレオンはこの老人からある種の好奇心をもって見られているのに気がついて、ふりかえって突然こう言った。

「そこで私をみつめているじいさんはだれか？」

「陛下」とミリエル氏は答えた。「陛下はじいさん（ボン・ノム）を眺め、私は偉人（グラン・トム）を眺めております。陛下も私も損をしておりません」

皇帝はその晩すぐ、この司祭の名を枢機卿にきいた。そしてしばらく後に、ミリエル氏は自分がディーニュの大司教に任命されたのを聞いて、たいへん驚かされたのである。

（1）　ボン・ノムという言葉は本来「善い人間」の意味。

それにしても、ミリエル氏の若いころの生活について話されているさまざまのうわさのうち、どれだけ真実のものがあったのだろう？　だれにもそれはわからなかった。革命前のミリエル家のことを知っている家族はほとんどなかったのだ。

うるさい口は多いが物を考える頭はほとんどない小さな町に新しく来た人がすべて忍ばねばならぬ運命を、ミリエル氏も忍ばねばならなかった。司教であったにもかかわらず、いや司教だったがゆえに、彼はそれを忍ばねばならなかったのだ。それはともかく、司教として九年間ディーニュに暮らして来た今では、小さな町の細民どもが最初のうち話の種にするそれらのうわさも、完全に忘れ去られてしまっていた。だれひとりそれを話そうともしなかったし、だれひとりそれを思い出そうとすらしなかったろう。

ミリエル氏はひとりの老嬢を連れてディーニュへ到着した。このバチスチーヌ嬢というのは、彼より十歳若い妹だった。

兄妹の召使いとしてはマグロワール夫人という、バチスチーヌ嬢と同年の女中がひとりいるだけだった。彼女は司祭様の女中の身分から、今ではお嬢様の小間使いと司教猊下[1]の家政婦という二重の肩書を持つことになったのである。

バチスチーヌ嬢は背の高い、顔色の悪い、やせた、おとなしい人だった。彼女は「尊敬すべき」ということばのあらわす理想の権化だった。というのは、女性が単なる尊敬を越えた人望を得るためには、母親でなければならないように思えるからである。彼女はかつて美しかったことはなかった。彼女のこれまでの生涯は神聖な事業の連続にほかならなかったが、こういう生涯がしまいに彼

〔1〕高位の聖職に対する敬称。

女の身に、ある種の純白さと澄んだ感じとを与えてしまった。そして年を取るにつれて、彼女は善人の持つ美しさと呼ぶことのできるようなものを身につけたのである。

マグロワール夫人は小柄な、色白の、太ってぽってりした、忙しげなおばあさんで、いつも息を切らしていたが、それは第一に忙しく働いていたから、第二には彼女が喘息を病んでいたからである。

ミリエル氏は到着すると、彼を旅団長のすぐ次の地位に置く勅令の命ずる礼遇を受けて、司教邸にはいった。まず市長と市会議長が彼を訪問し、彼のほうはまず将軍と知事を訪問した。

就任の手続きがすむと、町の人々は自分たちの司教が仕事にとりかかるのを待った。

二、ミリエル氏、ビヤンヴニュ猊下となる

ディーニュの司教邸は慈善病院と隣接していた。この司教邸は十八世紀の初めに、一七一二年にディーニュ司教となったアンリ・ピュジェ猊下の建てた、広く美しい石造りの邸宅だった。司教の部屋、客間、寝室、古いフィレンツェの様式にならってアーケードの歩廊のあるたいへん広い中庭、堂々たる木々の植わった庭園、すべては大らかな趣をそなえていた。

慈善病院はわずか二階建ての、小さな庭しかない狭い低い建物だった。

到着して三日後に司教は慈善病院を見舞った。見舞いが終わると、彼は院長に自分の家まで来ていただきたいと言った。

「院長さん」と彼は言った。「今あなたのところには患者が何人いますか？」

「二十六人でございます」

「私が勘定したとおりでした」
「ベッドがどうも詰まりすぎておりまして」と院長はつづけた。
「それは私も気がつきました」
「病室は小部屋ばかりで、換気がよくできません」
「私にはそう思われました」
「それからまた、お天気がよくても、回復期の患者たちにとっては庭が狭すぎまして」
「私もそう思いました」
「伝染病の流行時には——今年はチフスがありましたし、二年前には粟粒疹熱（ぞくりゅうしんねつ）があったのですが——百人も患者をかかえることが時々あります。そういうときにはお手上げです」
「そうでないかと私も考えました」
「しかたがありませんですよ、猊下、あきらめなくちゃなりません」と院長は言った。
この会話は一階の細長い食堂でおこなわれたのだった。司教はしばらく沈黙していた。それから彼は急に院長のほうをふりむいた。
「院長先生、この部屋にはどれほどの病床が入れられるとお思いですかな？」
「この猊下の食堂にですか？」と院長はびっくりして叫んだ。
司教は部屋をぐるりと見まわし、目測し、計算しているように見えた。
「二十床ははいるな」と彼はひとりごとのように言った。それから声を高めて、「ねえ院長さん、これから申し上げることを聞いてください。たしかにここにまちがったことがある。あなたのところには、五つか六つの小部屋に二十六人はいっている。私どもは三人でここにいる、ところが六十

人分の広さはあるのです。まちがいですよ、これはね。あなたがたは私の住居においでなさい、私はあなたのところをもらいましょう。私の家を返していただきたい、ここはあなたの家ですから」

翌日、二十六人の気の毒な連中が司教の御殿に移り、司教は病院にはいった。

ミリエル氏には全然財産はなかった。彼の家は革命のために破産していたからである。彼の妹は五百フランの終身年金を受けていたが、司祭館にいるときには、それだけで彼女自身の支出を十分まかなっていられた。ミリエル氏は国家から司教として一万五千フランの俸給を得ていた。慈善病院の建物に住みついたその日、ミリエル氏はこの金の使い方を次のようにきっぱりときめた。彼自身の書いた覚え書きをここにかかげる。

我が家の出費配分の覚え書き

小神学校のため……一五〇〇フラン
ラザリスト修道会……一〇〇フラン
モンディディエのラザリスト修道会士のため……一〇〇フラン
パリ外国宣教会神学校……二〇〇フラン
聖霊修道会……一五〇フラン
聖地の宗教施設……一〇〇フラン
聖母慈善協会……三〇〇フラン
なおアルルの同協会のため……五〇フラン
監獄改善事業……四〇〇フラン

囚人慰問救済事業……五〇〇フラン
債務監獄にいる一家の父親を釈放させるため……一〇〇〇フラン
司教区の貧しい小学校教師の手当補助……二〇〇〇フラン
オート・ザルプの救荒穀物庫……一〇〇フラン
ディーニュ、マノスク、シストロンの婦人
　修道会へ、無料貧民女子教育のため……一五〇〇フラン
貧しい人々のため……六〇〇〇フラン
私の個人出費……一〇〇〇フラン
　総計……一五〇〇〇フラン

ディーニュの司教の座を占めていたあいだじゅう、ミリエル氏はこの取りきめをほとんど全然変えなかった。

この取りきめをバチスチーヌ嬢は絶対服従で受けいれた。ただ女中のマグロワール夫人は少々ぶつぶつ言った。司教様は、すでにお気づきであろうが、自分のためには千フランしか残しておかなかった。これとバチスチーヌ嬢の年金と合わせて年に千五百フランにしかならない。この千五百フランで、二人の老婦人とこの老人は暮らしていたのだ。

それでも、どこかの村の司祭がディーニュに来たときには、マグロワール夫人の厳しい倹約とバチスチーヌ嬢の賢明な切りまわしのおかげで、司教様はなんとか相手をもてなしてやるだけのことはできたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong